ダッタン人の踊り／ボロディン（歌劇「イーゴリ公」より）

ボロディンは1833年帝政ロシアに生まれました。本職は医師でしたが、バラキレフ、キュイ、ムソルグスキー、リムスキー=コルサコフらと共にロシア五人組を結成し、反西欧・反プロフェッショナリズム・反アカデミズムのロシアの民族主義音楽を目指しました。

取り上げる題材も、ロシアの風土や歴史を題材にしたものが多く、歌劇「イーゴリ公」も中世ロシアの叙事詩『イーゴリ軍記』を題材にしています。

イーゴリ公は妻のアドバイスを聞かずに外敵ポロヴィッツ人との戦いに遠征しますが、息子と共にあえなく捕虜となってしまいます。この曲は外敵ポロヴィッツ人のハーン（首長）がイーゴリ公をもてなすシーンで演奏されるます。

捕虜生活の中でイーゴリ公の息子は、ハーンの娘と恋中になり、公認となります。イーゴリ公はハーンに「我々と再び戦わないと約束をするなら自由を与える」と言われますが、武士の意地で断ってしまいます。

曲は、ダッタン人の娘たちの踊りに続いて、フルートソロで始まる清涼なイントロのあと、オーボエが「風の翼に乗ってふるさとへと飛んでゆけ、懐かしい歌よ」と捕虜と

なった女性たちの歌をうたいはじめます。一転してテンポの速い曲ではポロヴェッツ人の男たちが踊り、ティンパの躍動感あふれるリズムのあとでは勇ましく君主ハーンをたたえます。これらが有機的に絡み合い、繰り返されてクライマックスを迎えます。

「くるみ割り人形」より／チャイコフスキー

チャイコフスキーはボロディンの7歳下で同じくロシアの作曲家です。モスクワ音楽院で教鞭をとるチャイコフスキーは、ロシア五人組とは距離を置いていました。

チャイコフスキーがバレエ界に与えた影響はとても大きいものでした。それまでバレエはオペラを華やかにするためだけのオマケでした。チャイコフスキーは手に汗握るストーリー展開や、キャラクターを引き立てるメロディとサウンドをバレエに与えました。これでバレエは単独でも楽しめる芸術になったのです。

「くるみ割り人形」は、「白鳥の湖」「眠りの森の美女」に続く3番目のバレエ音楽で、チャイコフスキーが亡くなる前年に完成されたものす。本日演奏するのはそのハイライトです。

第1曲　ちいさな序曲　チェロとコントラバスはお休みです。

第2曲　行進曲　クリスマス・イヴに一族友人が集うパーティーでのシーンです。

第3曲　第1幕の情景　招待客たちが帰り、夜中、少女クララはプレゼントでもらったくるみ割り人形がネズミの王と戦う夢を見ます。クララの応援で勝利すると、くるみ割り人形は王子になり、共にお菓子の国へ旅立ちます。

第4曲　金平糖の精の踊り　金平糖は原題では砂糖菓子ドラジェです。当時発明されたばかりであったチェレスタをチャイコフスキーが密かに輸入して、サプライズで使いました。

第5曲　ロシアの踊り（トレパック）　躍動感あるリズムと高いジャンプが見もののコサックダンスのシーンです。

第6曲　中国の踊り（お茶）　ファゴットがどこで息継ぎをしているかご注目を。

第7曲　葦笛の踊り　フルートのチームーワークにご注目ください。

第8曲　花のワルツ　誰もが心地よくなるメロディにお酔いしれてください。

交響曲第7番／ベートーヴェン

ベートーヴェンは葬送行進曲つきの交響曲を2曲作曲しています。ひとつは「英雄」と呼ばれる第3番、そしてもうひとつが、今回お届けする第7番です。

この2つの**第2楽章**を比べてみると、「英雄」の葬送は、一人の英雄を弔うためのように思われます。ぬかるみの道を、自らが重い棺を引きずるような足取りと、死者の冥福を祈るような中間部を持ちます。一方今回の第7番は、ならされた道を厳かに進む葬送の列を、主人公が道沿いで見守るかのようで、中間部では死者との思い出に浸ります。

第1楽章は気品あるオーボエソロで始まるイントロと、若々しい明瞭さを持つリズミカルな曲です。音楽大学を舞台にしたテレビのラブコメディ「のだめカンタービレ」のオープニングテーマに選ばれたことがうなずけます。**第3楽章**は速い3拍子のスケルツオで、軽妙なバレエのステップを思わせる表の顔と、自分の内面を見つめる内なる顔が交互に現れます。

そして一番のお楽しみは**第4楽章**です。「はしゃぎすぎ」と言いたくなるほどの躍動感あふれるリズムとシンプルなメロディの繰り返しがエネルギッシュなクライマックスをもたらします。

「英雄」はベートーヴェンが耳の病気の苦しみから立ち上がった記念碑的な作品ですが、この第7番には、その苦悩を完全に乗り越え、成功を手にしたベートーヴェンの自信に満ちた姿が伺われます。

「タンホイザー」序曲／ワーグナー

15歳のときベートーヴェンに感動し音楽家を志したワーグナーは、同じドイツの出身で、19歳の時に交響曲を作曲しますが、それ以降は歌劇・音楽劇を中心に作曲しています。

自分の罪を償うローマ巡礼の合唱を前後にヴェーヌスヴェルクの音楽を挟んだ大きな3部形式の曲です。